

# サッカー部が16大会ぶり 決勝で筑波大下し、 8度目の全国制覇

サッカー部が16大会ぶりに大学日本一に輝いた。1月11日、国立競技場で行われた全日本大学サッカー選手権大会（通称…インカ

レ）決勝戦で、中大は筑波大を2-1で下し、16大会ぶり8度目の優勝を飾った。晴天にめぐまれたこの日、国立競技場のバックスタン

Dには、大学関係者はじめ卒業生、学生らが大勢応援に駆けつけた。「サッカーの応援は初めて」というのはOBの岡島芳彦さん（昭和57年卒）。スタンド上段には、サッカー部OB



国立競技場の電光掲示板に輝く「優勝おめでとう 中央大学」

ドには、大学関係者はじめ卒業生、学生らが大勢応援に駆けつけた。「サッカーの応援は初めて」というのはOBの岡島芳彦さん（昭和57年卒）。スタンド上段には、サッカー部OB

2-1の1点リードで前半を終え、助川さんは「前半は流れの中でよい感じに点をつなぐことができました。後半は点を取られずに済むのではないでしょう」と余裕の表情。鈴木さんも「出だしは抜群。ポジショニングもよくできてい

栃木から応援に来てくれてます。高校の父母会の皆さんも沢山応援に駆けつけてくれました。息子がいま決勝戦のピッチに立っているのは最高の親孝行だと思っ



OBや大学関係者と喜びの握手を交わす山形雄介主将（当時）

「ハーフタイム終了直前、スタンド最前列で山形主将が応援席に向けて、メガホンで声を張り上げた。「あと45分で中央大学の歴史が変わります」」。後半、中大イレブンは筑波大の猛攻をしのぎ、ついに1点差を守りきった。そ

の瞬間、「おめでとう」「日本一」などの掛け声と、「We are 中央」コールが巻き起こり、応援席は校歌の大合唱と歓喜の渦に包まれた。優勝した中大から最優秀選手賞に櫛引祐輔選手（経3）、優秀選手賞に斎藤広野選手（文4）、新田圭選

## テレビ報道の最前線に触れる 5月スタートの裁判员制度に関心

佐藤健監督は、「苦しみながらも一人ひとりの頑張りで勝ち取った試合でした。技術的には相手が上でしたので、ディフェンス、運動量で対応しました」と決勝戦を振り返った。16大会ぶりの優勝には、「特別な感慨はないです」としたうえで、「今シーズンはタイト

ルを取りに行くという意識がみんなにありました。それだけのことをやってきた自信もあった。4年が3年以下の選手をしつかりまとめてくれたことが大きいといえるでしょう」とチーム一丸の優勝を強調した。

この日、応援に来ていた永井和之総長・学長は、「いや、こんなに嬉しいことはないですね。選手のみならずには中大に素晴らしい思い出をありがとう、と言いたい。今日の優勝は10年、20年と続く財産となるでしょう」と選手らを讃えた。



FNN 報道センター

その後に向かった報道のコントロール室では、薄暗い部屋の中の広い壁一面に大小いくつものテレビ画面がセットされている。こ

「Hakumon ちゅうおう」の「番外企画」として、学生記者7人が2月6日、東京・港区台場のフジテレビ本社を見学・取材した。体験取材の一環として行っているもので、学生記者がフジテレビを訪問したのは、数えて3回目。

この日、案内してくださったのは、深夜の報道番組『ニュースJAPAN』

のキャスターを務める箕輪幸人さん。事件、裁判などを担当する社会部出身で、5月からスタートする裁判员制度に精通した解説委員だ。

まず向かったのは、報道センター。政治、経済、社会など担当ごとに机が配置され、資料で一杯の机の間を、せわしなく人々が行き交う。ここではニュース内

容の選定と作成、映像の編集、そしてアナウンサーなど出演者も交えての放送内容の確認が行われていた。円卓の机には、夕方の報道番組『スーパーニュース』の放送を控え、打ち合わせをするメインキャスターの安藤優子さん、木村太郎さんの姿も見えた。



自民党総裁室

満了を9月  
に控え、衆  
院解散・総

裁室がある一角は、重厚な  
ガラス扉で仕切られており、

記者クラブの中には、記

## 政治の表舞台・永田町を取材 現場を肌で感じ、政治が少し身近に

箕輪さんは、「裁判所の敷居は高いと思われるかも知れませんが、そんなに高くありません」と前置き。そのうえで裁判員制度について、「法律の解釈の

ためではなく、裁判官3人の目よりも裁判員6人を合わせた9人の目でみるのが裁判員制度です。事件はど

験すれば、事件を身近に実感して、世の中をより良くしていこうと思うようにな

普段は新聞記者やテレビ報道記者でもなかなか中には入れないという。

者会見室が併設されていた。想像していたほどには広くない。むしろ狭く感じたくらいだ。

国会議事堂を中心に衆参  
両院の議員会館や各政党本

部などの建物が構える東  
京・永田町を訪ね歩く機会

選挙の時期が最大の関心事  
になっている。

と、総裁が座る椅子があつ

ている。

を得て、学  
生記者5人  
は編集長と  
一緒に1月  
30日、周辺  
を取材した。

の先には、野党第1党の民  
主党本部がある。永田町に  
は民主党本部もある。自民  
党本部では、紹介を得て訪  
ねた職員の方の案内で本部  
内を取材することができた。

同じフロアには、報道各  
社の拠点となっている平河  
クラブと呼ばれる自民党担  
当の記者クラブがある。こ  
の日は、国会開会中で閑散  
としていたが、ソファに横  
になって仮眠をとっている

今回の永田町周辺取材で  
は、普段、テレビでしか見  
ることのできなかつた政治  
の現場やそれを国民に伝え  
る記者の仕事を目の当たり  
にして、政治を少し身近に  
感じることができた

(学生記者 吉田百合香 Ⅱ  
法学部4年)

# 総合政策学部創立15周年記念式典開く 講演会とシンポジウム、祝賀会盛大に

総合政策学部の創立15周年を祝う記念式典が3月14日午後、駿河台記念館で盛大に催された。この日は、講演会と卒業生をパネリストにしたシンポジウムが行われたあと、関係者が多数出席して祝賀会が開かれ、15周年を祝って親睦を深めた。

記念式典では冒頭、横山彰・総合政策学部長が開会挨拶したのに続き、初代学部長の渥美東洋先生が創立の構想について講話。この中で、渥美先生は、「カベの向こう側にいる人と、しっかりとコミュニケーションして、どうしたらカベを壊せるかを考える人を育てる学部にしたかった」として、ベルリンの壁崩壊など当時

の国際情勢の変化を踏まえ、新しい時代に向けた学部の

創立を構想したことを紹介された。



総合政策学部創立15周年シンポジウムのパネリストの皆さん

このあと復旦大学国際政治学部長の樊勇明先生が、『中国经济の行方と中日交流』と題して、またドイツ―日本研究所所長のフロリアン・クルマス先生が『言語の選択―経済的な考察から』と題して、それぞれ記念講演した。

休憩をはさんで行われた「私たちの総合政策」と銘打ったシンポジウムでは、平野晋教授の司会で、総合政策学部の卒業生6人をパネリストに、なぜ総合政策学部を選んだか、学部時代をどう過ごしたか、などについて活発に討論を交わした。

この中で、総政を選んだ理由についてパネリストは、「何でも学んで選択肢をみつけるには、何か示唆を与えてくれるのではないかと考えた」（1期生の大町和也さん）日本放送協会報道局、「いろいろなもののみで、勉強してみたかった」

（2期生の友知政樹さん）  
 沖縄国際大学経済学部地域環境政策学科学科准教授、「既存の枠に縛られないコンセプトにひかれた」（3期生の久保紀世子さん）  
 朝日新聞記者、「国際関係とITと英語の3つが学べるのは総政しかなかった」（5期生の野村留美子さん）  
 JICAアフガニスタン事務所、「社会科が好きで、歴史、地理、政経などいろいろ学べ、しかも英語に強いので決めた」（10期生の北本紗織さん）  
 中央大学高等学校英語科教師、「何でもできると考えて入った」（11期生の渡邊倫幸さん）  
 総務省行政管理局行政情報システム企画課「などと当時の考えを披露した。

シンポジウムのあとは、会場を移して、祝賀会が開かれ、15年間の歩みを振り返りながら、さらなる学部の発展について話の花を咲かせた。  
 （編集室）